

## 国内の畜産物の需給動向

# 牛肉

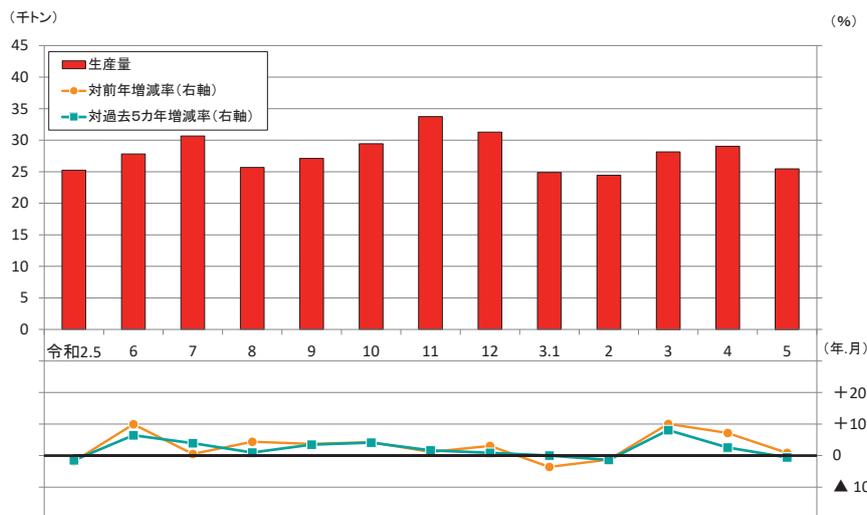
### 3年5月の牛肉生産量、前年同月比0.9%増

1 令和3年5月の牛肉生産量（部分肉ベース）は、2万5458トン（前年同月比0.9%増）と前年同月をわずかに上回った（図1）。品種別では、和牛は1万1925トン（同1.5%増）、交雑種は6395トン（同2.1%増）と、ともに前年同月をわずかに上回った。

一方で、乳用種は6717トン（同1.5%減）と、前年同月をわずかに下回った。

なお、過去5カ年の5月の平均生産量との比較では、0.6%減とわずかに下回る結果となった。

図1 牛肉生産量の推移



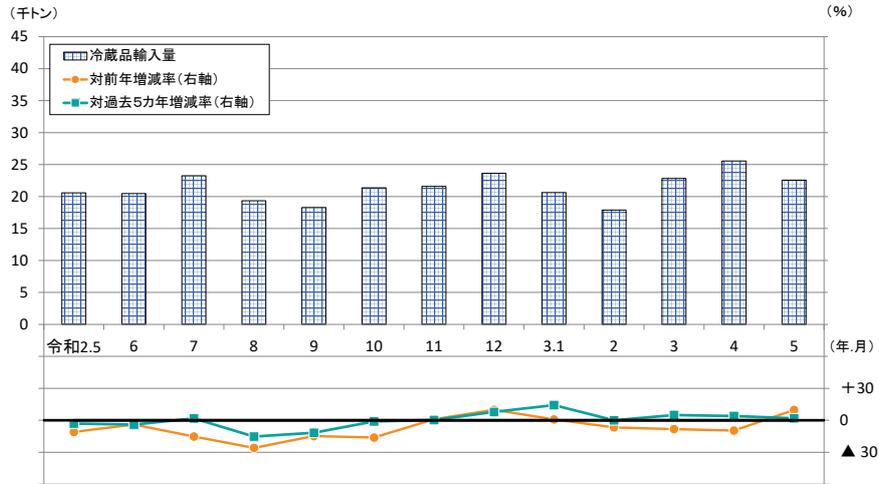
資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注：部分肉ベース。

2 5月の輸入量は、冷蔵品は、前年同月の輸入量が新型コロナウイルスの感染拡大に伴い北米の現地工場が稼働停止した影響により少なかったことなどから、2万2568トン（同9.7%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図2）。冷凍品は、前年同月の輸入量が不足する冷蔵品の代替により多かったことに加え、豪州産牛肉の生産量

減少や米国産牛肉のアジア諸国への輸出量の増加および米国の国内需要の増加による現地相場の高騰などから、2万7062トン（同8.1%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図3）。この結果、全体では4万9633トン（同0.8%減）と前年同月をわずかに下回った。

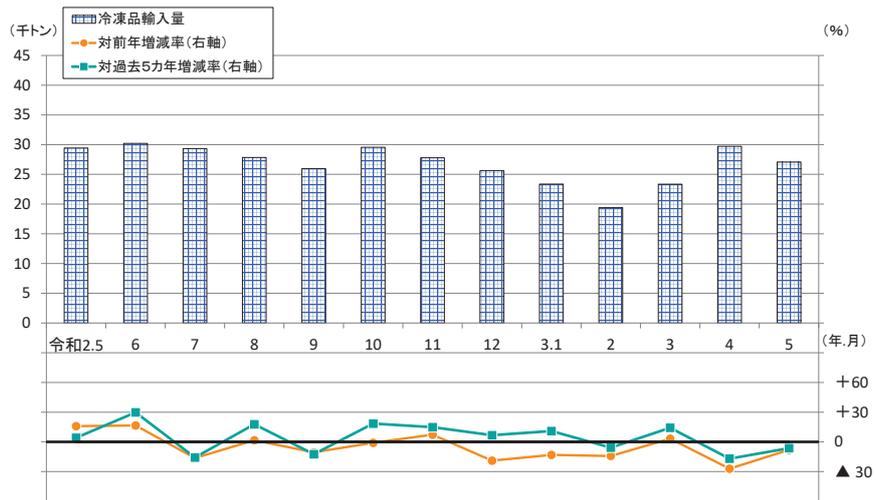
なお、過去5カ年の5月の平均輸入量と

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。

の比較では、冷蔵品は1.9%増とわずかに上回る一方、冷凍品は6.4%減とかなりの程度下回る結果となった。

3 5月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）は、204グラム（同16.1%減）と前年同月を大幅に下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の5月の平均消費量との比較では、4.9%増とやや上回る結果となった。

一方、外食産業全体の売上高（同19.8%増）は、緊急事態宣言が延長され酒類提供店への休業要請があったものの、昨年の

落ち込みの反動から前年同月を大幅に上回る結果となった。しかしながら、一昨年よりは依然として下回って推移している（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態では、ハンバーガー店を含むファーストフード洋風はテイクアウト・デリバリーなどにより好調が続いたことから、同10.3%増と前年同月をかなりの程度上回った。また、牛丼店を含むファーストフード和風は高付加価値メ

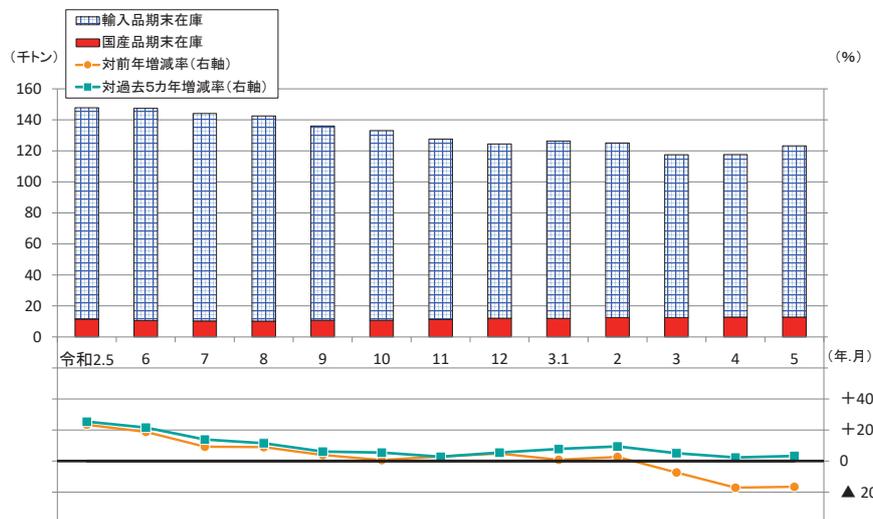
ニューの好調などにより客単価が上昇したことから同12.1%増とかなり大きく、焼き肉も郊外立地店に家族客が戻ったことから同35.5%増と大幅に、いずれも前年同月を上回った。

4 5月の推定期末在庫は、12万3233トン（同16.6%減）と前年同月を大幅に下回った（図4）。このうち、輸入品は11万

378トン（同19.0%減）と前年同月を大幅に下回った。

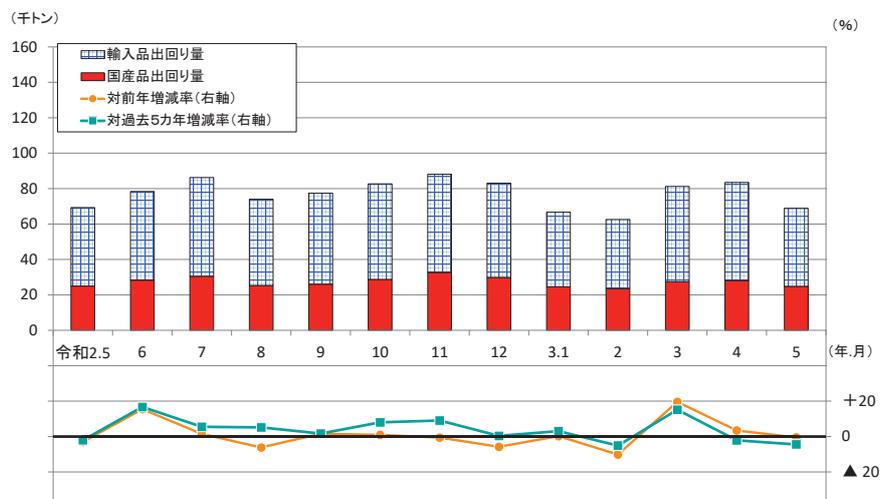
推定出回り量は、6万8920トン（同0.5%減）と前年同月をわずかに下回った（図5）。このうち、国産品は2万4842トン（同0.5%減）、輸入品は4万4079トン（同0.5%減）と、ともに前年同月をわずかに下回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 高城 啓)

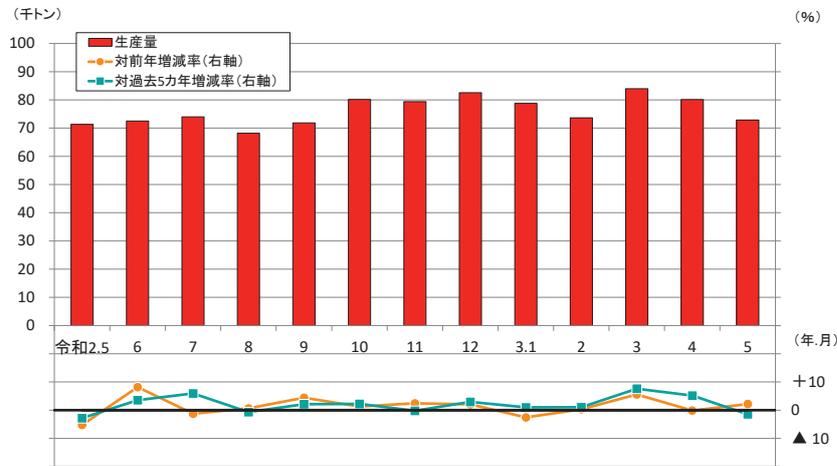
# 豚 肉

## 3年5月の豚肉生産量、前年同月比2.2%増

1 令和3年5月の豚肉生産量は、7万2872トン（前年同月比2.2%増）と前年同月をわずかに上回った（図6）。

なお、過去5カ年の5月の平均生産量との比較では、1.5%減とわずかに下回る結果となった。

図6 豚肉生産量の推移



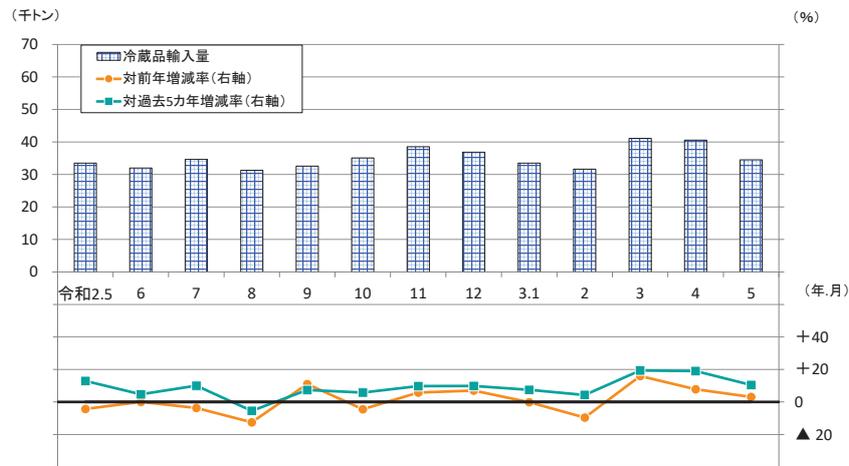
資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注：部分肉ベース。

2 5月の輸入量は、冷蔵品は、前年同月の輸入量が北米の現地工場の稼働停止の影響により少なかったことなどから、3万4508トン（同3.1%増）と前年同月をやや上回った（図7）。冷凍品は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響による外食需要の減少に加え、アジア諸国を中心とした旺盛な買い付けや北米およびEU諸国の国内需要の増加による現地価格

の高騰などから、3万6676トン（同20.9%減）と前年同月を大幅に下回った（図8）。この結果、全体では7万1194トン（同10.9%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

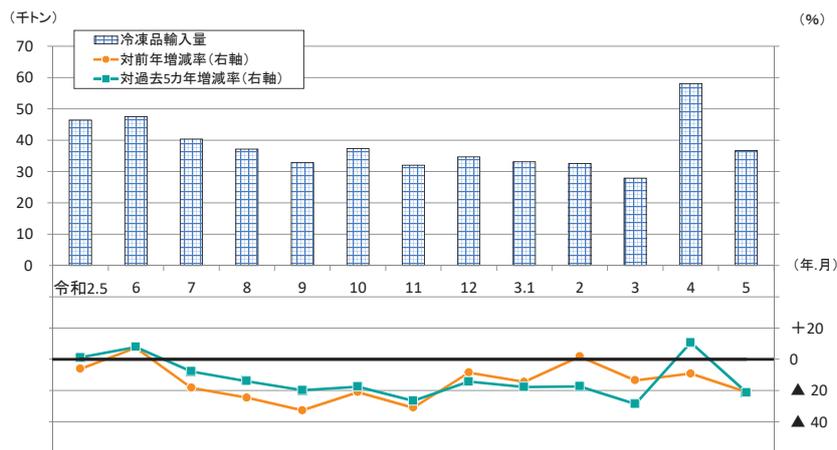
なお、過去5カ年の5月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は10.5%増とかなりの程度上回った一方、冷凍品は21.1%減と大幅に下回る結果となった。

図7 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。

図8 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。

3 5月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）は、656グラム（同4.0%減）と前年同月をやや下回った（総務省「家計調査」）。

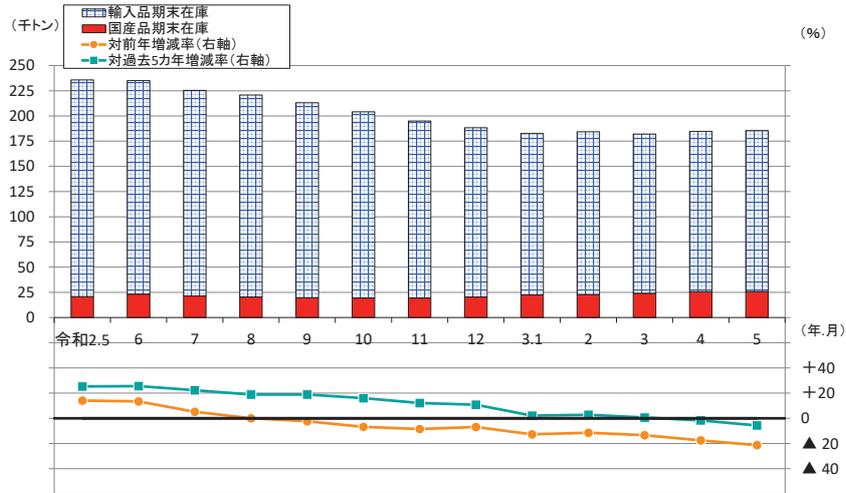
なお、過去5カ年の5月の平均消費量との比較では、9.9%増とかなりの程度上回る結果となった。

4 5月の推定期末在庫は、18万5475トン（同21.3%減）と前年同月を大幅に下回った。このうち、輸入品は、15万9623

トン（同25.7%減）と前年同月を大幅に下回った（図9）。

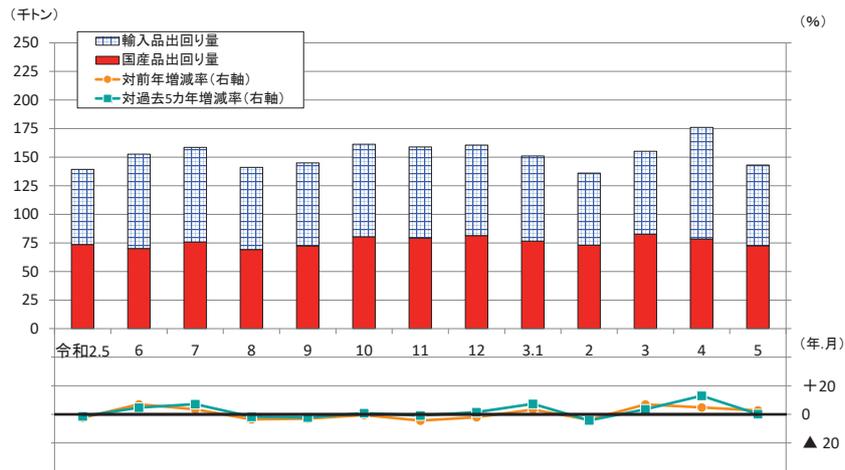
推定出回り量は14万3136トン（同2.7%増）と前年同月をわずかに上回った（図10）。このうち、国産品は7万2522トン（同1.4%減）と前年同月をわずかに下回った一方、輸入品は7万0614トン（同7.3%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

図9 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図10 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 田中 美宇)

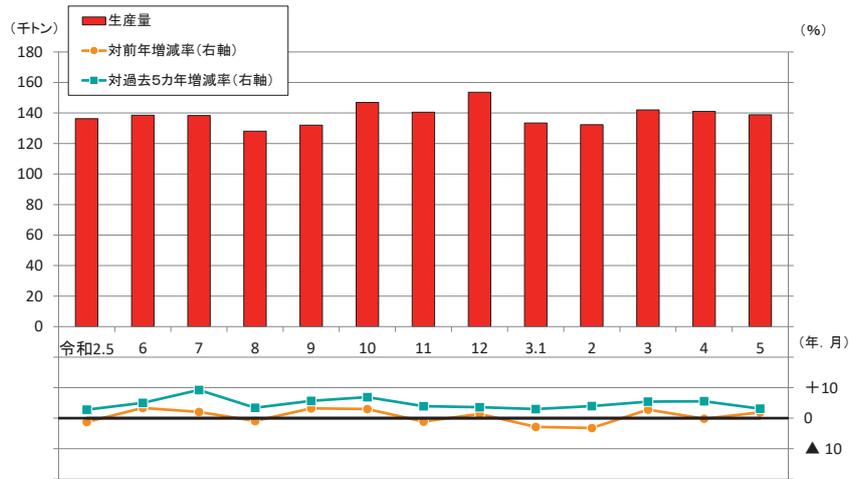
## 鶏 肉

### 3年5月の鶏肉生産量、前年同月比1.9%増

1 令和3年5月の鶏肉生産量は、好調な需要を背景に、13万8826トン（前年同月比1.9%増）と前年同月をわずかに上回った（図11）。

なお、過去5カ年の5月の平均生産量との比較では、3.1%増とやや上回る結果となった。

図 11 鶏肉生産量の推移



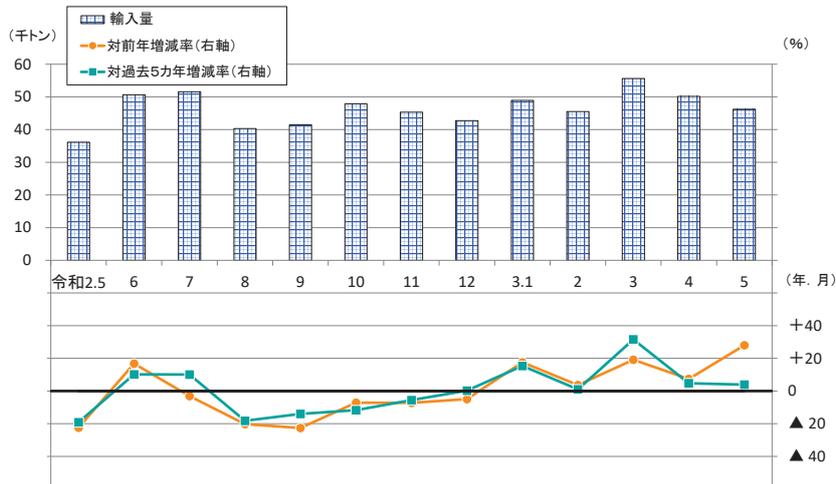
資料：農畜産業振興機構調べ  
 注1：骨付き肉ベース。  
 注2：成鶏肉を含む。

2 5月の輸入量は、前年同月の輸入量がブラジル産の入船遅れにより一部通関が翌月に繰り延べされたことなどにより少なかったことから、4万6229トン(同28.0%増)

と前年同月を大幅に上回った(図12)。

なお、過去5カ年の5月の平均輸入量との比較では、3.9%増とやや上回る結果となった。

図 12 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
 注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

3 5月の鶏肉の家計消費量(全国1人当たり)は、521グラム(同10.1%減)と前年同月をかなりの程度下回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の5月の平均消費量との比較では、7.9%増とかなりの程度上回る結果となった。

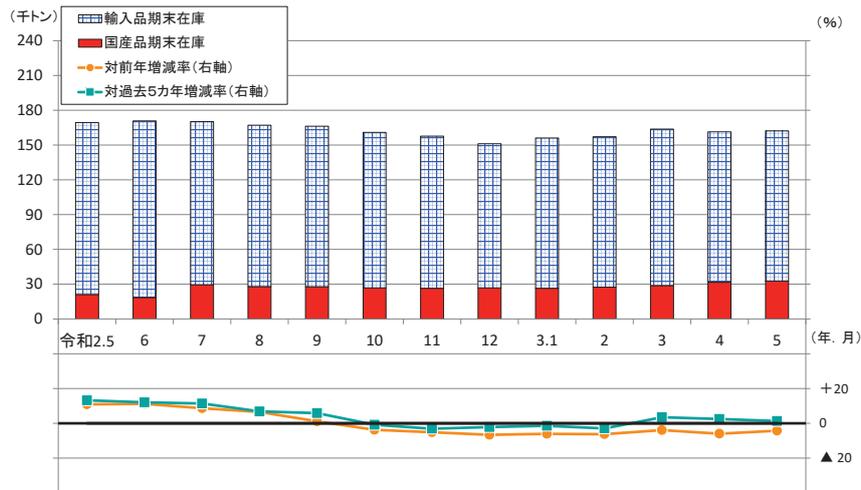
4 5月の推定期末在庫は、16万2167ト

ン（同4.3%減）と前年同月をやや下回った（図13）。このうち、輸入品は12万9408トン（同12.7%減）と前年同月をかなり大きく下回った。

推定出回り量は、18万4300トン（同

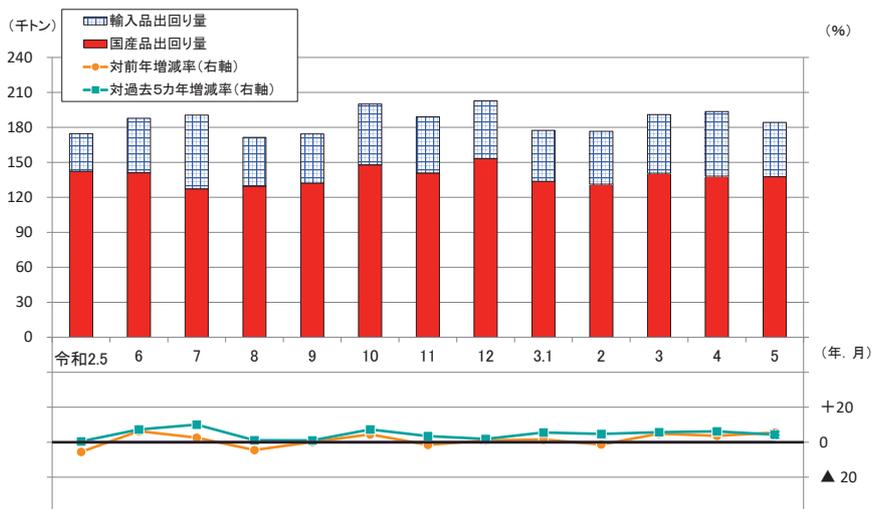
5.5%増）と前年同月をやや上回った（図14）。このうち、国産品は13万7723トン（同3.2%減）と前年同月をやや下回った一方、輸入品は4万6577トン（同44.0%増）と前年同月を大幅に上回った。

図13 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図14 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 前田 絵梨)

# 令和2年度成牛および豚のと畜頭数・令和2年食鳥処理羽数

今回、農林水産省が公表した食肉流通統計（令和2年4月～3年3月）および食鳥流通統計（令和2年1～12月）の結果について畜種ごとに紹介する。

## 【牛肉】

### 令和2年度の成牛のと畜頭数、2年ぶりに増加

農林水産省が公表した令和2年度の「食肉流通統計」によると、成牛のと畜頭数は105万2896頭（前年度比1.5%増）と、前年度をわずかに上回った。2年度は交雑牛および乳牛のと畜頭数が減少したものの、和牛のと畜頭数の増加が大きかったことから、全体では2年ぶりの増加となった。

また、調査卸売市場（中央卸売市場<sup>（注1）</sup>および地方卸売市場<sup>（注2）</sup>。以下同じ。）における市場経由率（卸売市場における取引成立頭数<sup>（注3）</sup>が全と畜頭数に占める割合）を見ると、31.8%（33万5268頭）となった。このうち、中央卸売市場は23.5%（24万7093頭）と前年度より0.4ポイント上昇し、7年ぶりに前年度を上回った。また、地方卸売市場も8.4%（8万8175頭）と前年度より0.2ポイント上昇し、3年ぶりに前年度を上回った。

（注1）卸売市場法（昭和46年法律第35号）の規定により開設されている仙台、さいたま、東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸、広島および福岡の10市場。

（注2）卸売市場法の規定により開設されている地方卸売市場のうち、畜産経営の安定に関する法律（昭和36年法律第183号）第3条第1項の標準的販売価格の算出に用いられる市場をいい、茨城、宇都宮、群馬、川口、山梨、岐阜、浜松、東三河、四日市、姫路、加古川、西宮、岡山、坂出および佐世保の15市場。なお、食肉流通統計では「主要市場」と呼ぶ。

（注3）卸売市場への上場頭数のうち、卸売業者と売買参加者との間に取引が成立した頭数。

### 和牛のと畜頭数、4年連続で増加

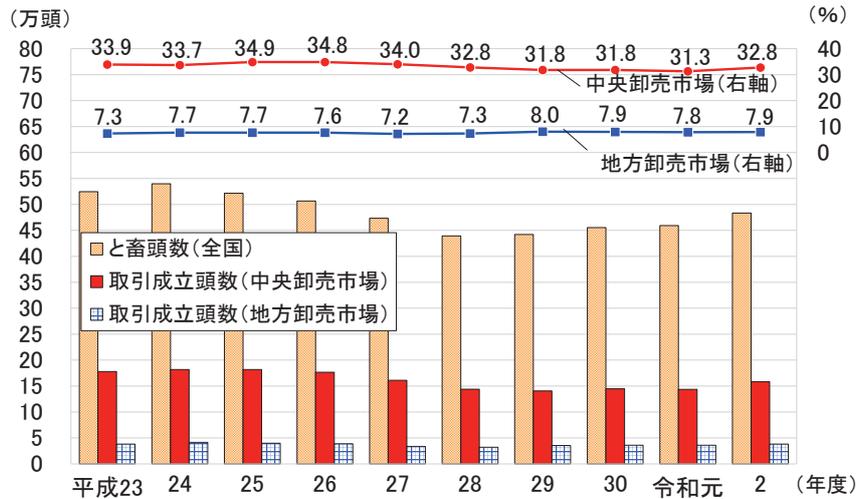
和牛のと畜頭数は、平成25年度以降減少傾向で推移したが、繁殖雌牛の増頭などにより、29年度からは回復傾向となっている。令和2年度は、48万3307頭（前年度比5.2%増）と前年度をやや上回り、4年連続の増加となった（図15）。

また、市場経由率を見ると、中央卸売市場は32.8%（15万8327頭）と前年度より1.5ポイント上昇し、7年ぶりに前年度を上回った。地方卸売市場も7.9%（3万8160頭）と前年度より0.1ポイント上昇し、3年ぶりに前年度を上回った。

直近10年間の市場経由率の推移を見ると、中央卸売市場は平成27年度まではおおむね34%台で推移し、その後は令和元年度まで低下傾向となっている。卸売価格の推移を見ると、と畜頭数の減少を受けて平成24～28年度は上昇基調にあったことから、卸売価格が上昇傾向にある期間は中央卸売市場への出荷頭数が増える傾向にあることがうかがえる（図16）。

また、成牛のうち、中央卸売市場の市場経由率は和牛が30%台と最も高く、市場関係者などによると、和牛の生産者において、市場取引で出荷牛が高く評価されることへの期待が大きいことが要因の一つとして挙げられている。

図 15 和牛のと畜頭数および市場経由率の推移

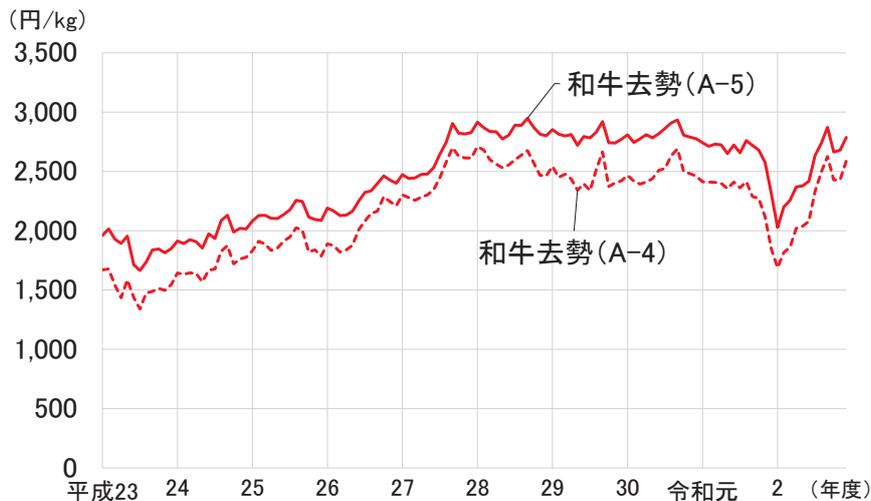


資料：農林水産省「食肉流通統計」

注1：中央卸売市場は10市場（仙台、さいたま、東京、名古屋、京都、大阪、神戸、広島、福岡）の計。地方卸売市場は主要15市場（茨城、宇都宮、群馬、川口、山梨、岐阜、浜松、東三河、四日市、姫路、加古川、西宮、岡山、坂出、佐世保）の計。

注2：令和2年度は速報値。

図 16 和牛の卸売価格の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場（株）

注：消費税を含む。

### 交雑牛のと畜頭数、2年連続で減少

交雑牛のと畜頭数は、乳用種雌牛の減少、和牛受精卵の活用から、平成30年12月以降、減少傾向となっている。令和2年度は、22万7624頭（前年度比2.8%減）と前年度をわずかに下回り、2年連続の減少となった(図

17)。

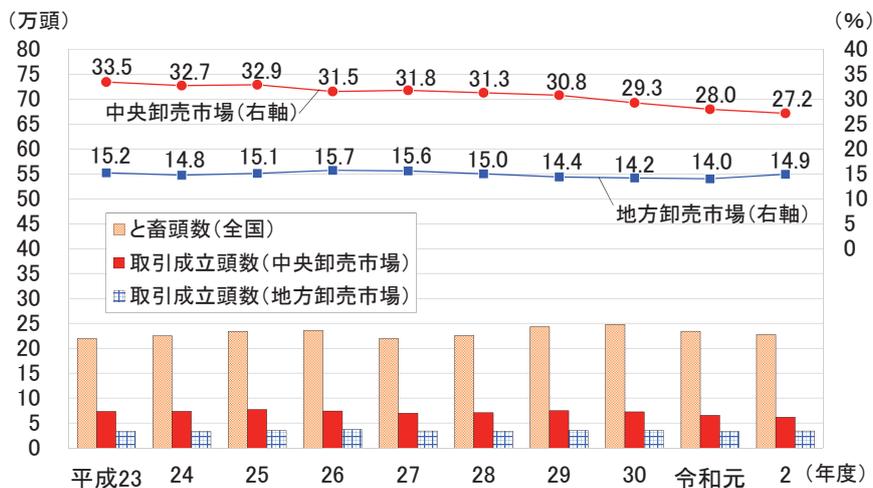
また、市場経由率を見ると、中央卸売市場は27.2%（6万1837頭）と前年度より0.8ポイント低下した一方、地方卸売市場は14.9%（3万4002頭）と前年度より0.9ポイント上昇した。

直近10年間の市場経由率の推移を見ると、

中央卸売市場は平成27年度以降、地方卸売市場は26年度をピークに、いずれもその後は低下傾向で推移しているが、地方卸売市場は令和2年度に上昇に転じた。交雑牛の卸売価格が上昇基調にあった平成27年度までは、中央卸売市場および地方卸売市場における市場経由率はおおむね横ばいから微増傾向で推移していたものの、価格が横ばいとなった

28年度から令和元年度までは低下傾向で推移している（図18）。なお、2年度に地方卸売市場の市場経由率が上昇した要因は、栃木県内の食肉センターが再編統合され、宇都宮市場に処理が集約されたことに伴い、当該市場の取引成立頭数が例年に比べて大きく増加したことによるものと考えられる。

図 17 交雑牛のと畜頭数および市場経由率の推移

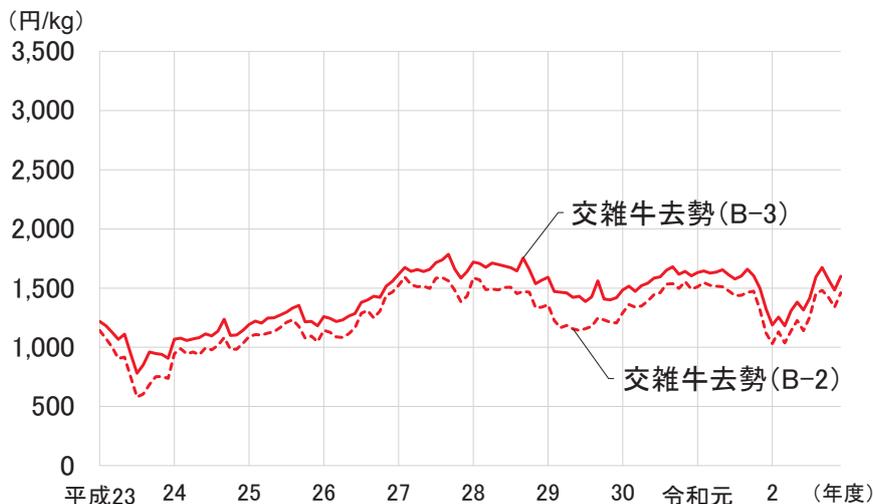


資料：農林水産省「畜産物流通調査」、「食肉流通統計」

注1：中央卸売市場は10市場（仙台、さいたま、東京、名古屋、京都、大阪、神戸、広島、福岡）の計。地方卸売市場は主要15市場（茨城、宇都宮、群馬、川口、山梨、岐阜、浜松、東三河、四日市、姫路、加古川、西宮、岡山、坂出、佐世保）の計。

注2：令和2年度は速報値。

図 18 交雑牛の卸売価格の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場（株）

注：消費税を含む。

## 乳牛のと畜頭数、9年連続の減少

乳牛のと畜頭数は、乳用種雌牛の減少や性別別精液の活用による乳用後継牛確保などの動きがあり、乳用種雄牛が減少したことから、令和2年度は32万8098頭（同1.2%減）と前年度をわずかに下回り、9年連続で減少した（図19）。

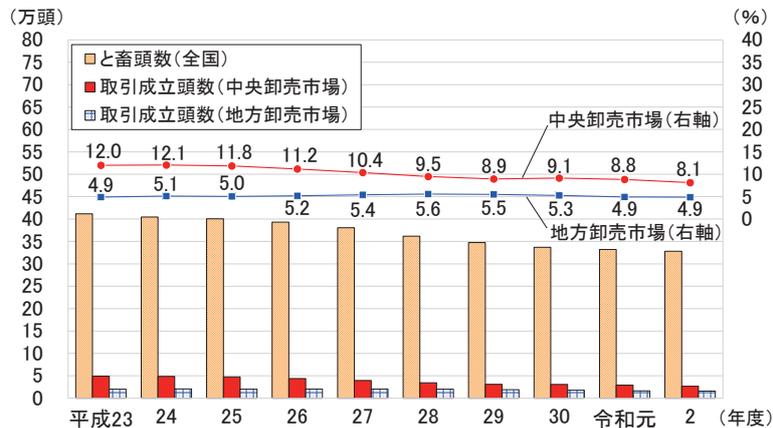
また、市場経由率を見ると、中央卸売市場は8.1%（2万6676頭）と前年度より0.7ポイント低下した。地方卸売市場は4.9%（1

万6006頭）と前年度並みであった。

直近10年間の市場経由率の推移を見ると、中央卸売市場は平成24年度以降、地方卸売市場は28年度をピークに、いずれもその後は低下傾向で推移している。

乳牛は和牛や交雑牛に比べて市場経由率が低いですが、市場関係者によれば、卸売市場への出荷にかかる輸送費用などを削減するため、生産地に近い食肉センターなどの活用が進んでいることが要因の一つとして挙げられている（図20）。

図19 乳牛のと畜頭数および市場経由率の推移

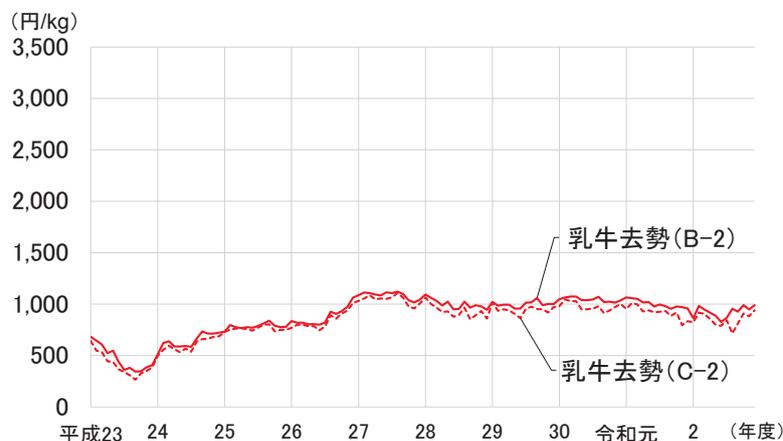


資料：農林水産省「畜産物流通調査」、「食肉流通統計」

注1：中央卸売市場は10市場（仙台、さいたま、東京、名古屋、京都、大阪、神戸、広島、福岡）の計。地方卸売市場は主要15市場（茨城、宇都宮、群馬、川口、山梨、岐阜、浜松、東三河、四日市、姫路、加古川、西宮、岡山、坂出、佐世保）の計。

注2：令和2年度は速報値。

図20 乳牛の卸売価格の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場（株）

注：消費税を含む。

## 【豚肉】

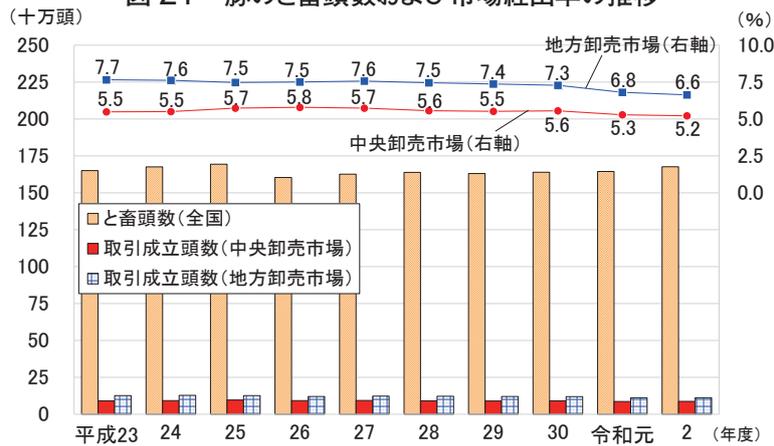
### 令和2年度の豚のと畜頭数、3年連続の増加

豚のと畜頭数は、平成25年度に発生した豚流行性下痢（PED）発生の影響などから26年度に前年度を下回って以降、横ばいで推移している。農林水産省が公表した「食肉流通統計」によると、令和2年度は、1676万2807頭（前年度比1.9%増）と前年度をわずかに上回った。2年度は生育が順調で出荷頭数が増加したとともに、近年の子取用雌豚の増加などから、3年連続の増加となった。

また、市場経由率を見ると、中央卸売市場は、5.2%（87万4200頭）と前年度より0.1ポイント低下し、地方卸売市場も6.6%（111万1766頭）と前年度より0.2ポイント低下した（図21）。

直近10年間の市場経由率の推移を見ると、平成30年度までは中央卸売市場は5%台を、地方卸売市場は7%台をおおむね安定して推移していたものの、令和元年度は豚熱発生の影響により、中央卸売市場のうち名古屋市場で、地方卸売市場のうち岐阜市場で、それぞれ取引成立頭数が例年に比べて大きく減少し、2年度も引き続き低下傾向となっている。

図 21 豚のと畜頭数および市場経由率の推移

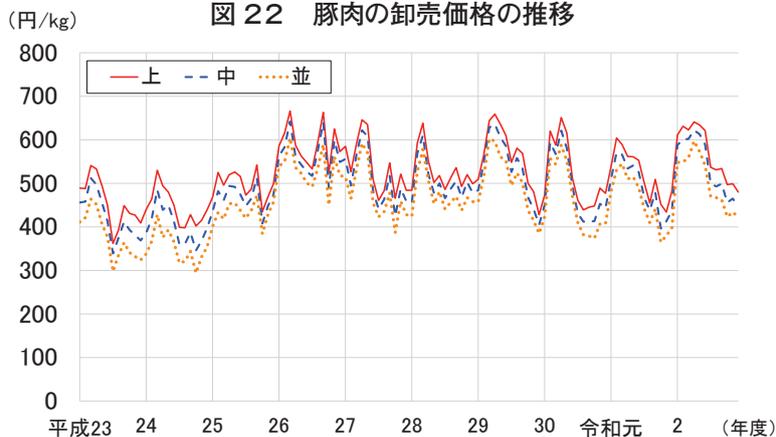


資料：農林水産省「食肉流通統計」

注1：中央卸売市場は10市場（仙台、さいたま、東京、名古屋、京都、大阪、神戸、広島、福岡）の計。地方卸売市場は主要15市場（茨城、宇都宮、群馬、川口、山梨、岐阜、浜松、東三河、四日市、姫路、加古川、西宮、岡山、坂出、佐世保）の計。

注2：令和2年度は速報値。

図 22 豚肉の卸売価格の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場（株）

注：消費税を含む。

## 【鶏肉】

### 令和2年の肉用若鶏の処理羽数・処理重量、9年連続の増加

農林水産省が令和3年5月28日に公表した「食鳥流通統計調査」によると、2年（1～12月）の食鳥処理羽数は8億1784万羽（前年比1.9%増）、処理重量は233万1650トン（同1.5%増）といずれも前年をわずかに上回った（図23）。

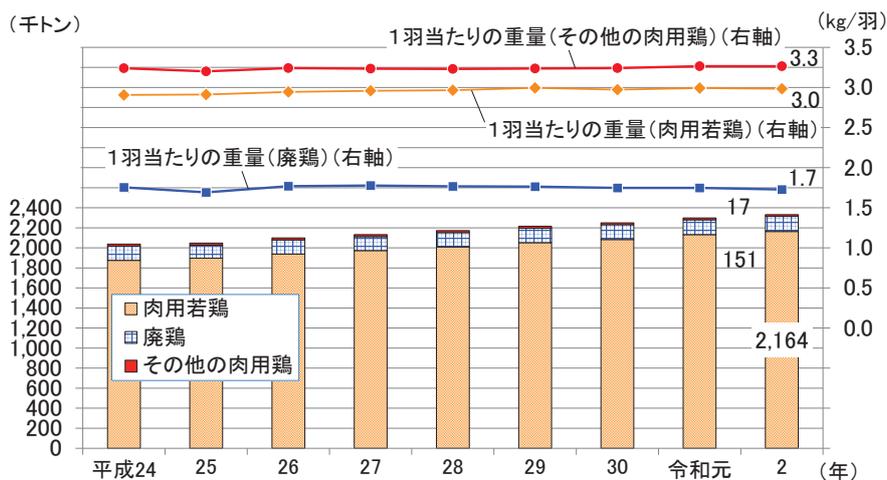
このうち、全体の約9割を占める「肉用若鶏（ふ化後3カ月齢未満）」は、近年の好調な鶏肉需要を受け、生産者の増産意欲が高まったことから、処理羽数が7億2519万羽（同1.8%増）、処理重量が216万3628トン（同1.5%増）と、いずれも9年連続の増加となった。また、1羽当たりの重量は3.0キログラム（同0.3%減）と、前年並みとなった。重量は年々増加傾向にあることから、大型で成長の早い品種の導入が進んでいることがう

かがえる。

全体の約1割を占める「廃鶏（採卵鶏または種鶏を廃用した鶏）」は、処理羽数が8750万3000羽（同3.5%増）とやや、処理重量が15万1220トン（同2.4%増）とわずかに、いずれも前年を上回った。また、1羽当たりの重量は1.7キログラム（同1.1%減）と、前年をわずかに下回った。なお、採卵鶏の全国飼養羽数は近年増加傾向にあるため、処理羽数、処理重量ともに高い水準で推移している。

地鶏などが含まれる「その他の肉用鶏（ふ化後3カ月齢未満）」は、処理羽数が514万7000羽（同7.6%減）、処理重量が1万6802トン（同7.7%減）といずれも前年をかなりの程度下回った。これは、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大による外食需要の減少が影響しているものと考えられる。また、1羽当たりの重量は3.3キログラム（同0.0%）と、前年並みとなった。

図23 食鳥処理重量および1羽当たりの重量の推移



資料：農林水産省「食鳥流通統計調査」

注1：「処理重量」とは、食鳥処理場が肉用目的で処理した生体の重量をいう。

注2：「その他の肉用鶏」とは、ふ化後3カ月齢以上の鶏をいう。

注3：年間食鳥処理羽数30万羽以上の食鳥処理場が調査対象。

（畜産振興部 高城 啓）

# 牛乳・乳製品

## 5月の北海道生乳生産量、過去最高水準

### 5月の生乳生産量、前年同月比1.9%増

令和3年5月の生乳生産量は、66万9904トン（前年同月比1.9%増）と前年同月をわずかに上回った（図24）。地域別に見ると、北海道は、5月としては過去最高水準の37万トン（同2.5%増）となった（図25）。ホクレン農業協同組合連合会による5月の地区

別の道内生乳受託乳量（速報値）を見ると、帯広の11万4014トン（同4.1%増）、中標津の7万4236トン（同2.6%増）、北見の5万3240トン（同2.3%増）などがけん引する形となっている。都府県も29万9904トン（同1.3%増）と3カ月連続して前年同月をわずかに上回り、堅調に推移した。

図 24 生乳生産量の推移

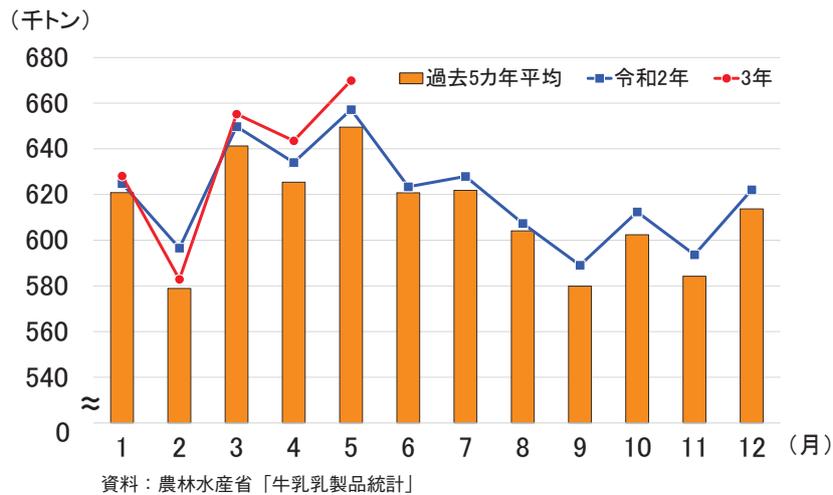
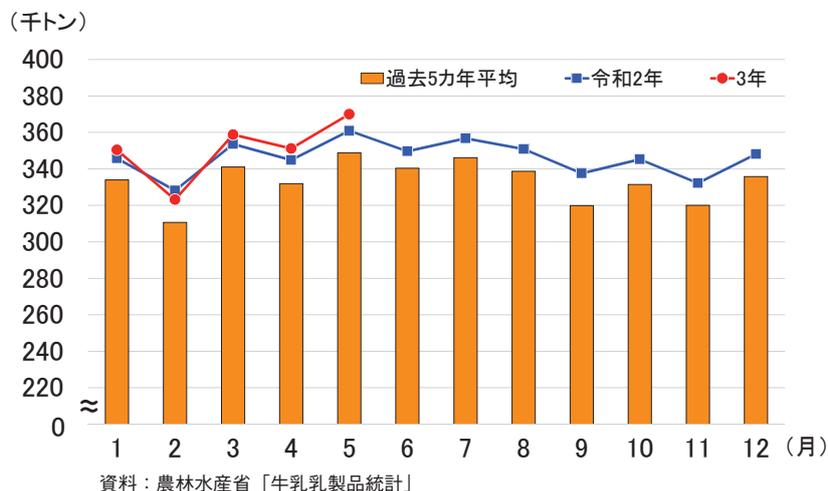


図 25 北海道の生乳生産量の推移



3年5月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは、34万8527トン(同4.0%増)と前年同月をやや上回った。このうち、業務用向け処理量については、2万5125トン(同33.3%増)と、先月と同様に新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響によって大きく減少した前年の反動で前年同月を大幅に上回った。

乳製品向けは、31万7240トン(同0.4%減)と4カ月連続して前年同月を下回った。品目別に見ると、クリーム向けは、業務用需要が大幅に減少した前年の反動で5万8434トン(同9.2%増)と前年同月をかなりの程度上回った。一方で、チーズ向けは3万8938トン(同11.1%減)と前年同月をかなり大きく下回り、脱脂粉乳・バター等向けも、17万688トン(同1.5%減)と前年同月をわずかに下回った(農林水産省「牛乳乳製品統計」、農畜産業振興機構「交付対象事業者別の販売生乳数量等」)。

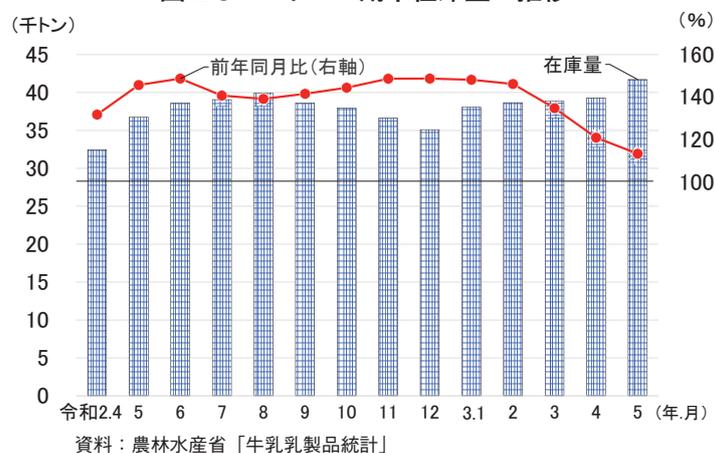
## バター、脱脂粉乳などの乳製品在庫は引き続き高水準

生乳生産量が順調な増加傾向にある中、乳製品の推定出回り量は前年の反動で前年同月を上回っているものの、引き続き在庫量は高水準で推移している。5月の期末在庫量は、バターが4万1721トン(前年同月比13.5%増)、脱脂粉乳が8万8803トン(同3.3%増)となっている(図26)。

特にバターについては、年初からの緊急事態宣言発令およびまん延防止等重点措置適用が続いたことで、外食や観光業などによる業務用需要への影響が長期化している。

こうした状況に対処するため、当機構としては、生産者団体とも連携しバターの需要拡大(輸入バターや輸入調製品との置換など)に対する支援を実施しており、約8000トンの在庫削減効果が見込まれている。また、脱脂粉乳についても当機構が行う飼料等への転用対策によって約6000トンの在庫が消化されるとともに、生産者団体が行う新規需要対策による約1万トンの在庫削減効果も見込まれている。

図 26 バターの期末在庫量の推移



(酪農乳業部 古角 太進)

# 鶏卵

## 鶏卵卸売価格は4カ月連続で前年同月を上回る

令和3年6月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、1キログラム当たり259円（前年同月比99円高）と4カ月連続で前年同月を上回り、直近5カ年の6月の同価格の中で最も高い水準となった（図27）。例年、年明けに下落した同価格は、春先に向けて再び上昇した後、気温の上昇とともに低下する傾向がある。しかしながら、高病原性鳥インフルエンザの発生による今シーズンの採卵鶏における殺処分羽数は全国の採卵鶏飼養羽数の約5%を占める約900万羽と多かったことなどにより、今年は例年とは異なる価格動向となっている。

なお、日ごとの価格の推移を見ると、1月以降上昇していた同価格は5月に260円まで上昇し、その後6月28日に5円安の同255円となった。

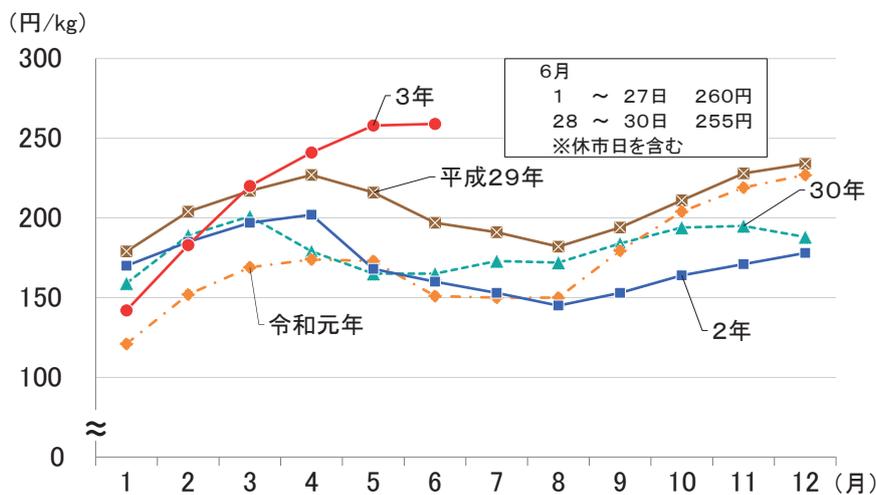
今後について、供給面を見ると、え付けし

たひなが産卵を開始するのは約5カ月後とされるが、鶏卵供給量に影響を与える一因となる採卵用めすの出荷・え付け羽数<sup>(注)</sup>は、一般社団法人日本種鶏孵卵協会によると、3年5月は859万8000羽（前年同月比4.4%減）と前年同月をやや下回っている。3年1～5月を見ても4245万8000羽（前年同期比5.0%減）と前年同期をやや下回っているものの、4月は同羽数が前年同月を上回っていたこともあり、引き続き、今後の同羽数の動向が注目される。

需要面は、気温の上昇に伴い需要が減少する時期ではあるが、例年と比べると内食および中食の堅調な需要が期待される一方、外食需要の早急な回復は難しいとみられる。

(注) 一般社団法人日本種鶏孵卵協会調査の報告羽数の集計値であって、全国の推計値ではない。

図27 鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」  
注：消費税を含まない。

## 鶏卵小売価格、2カ月連続で前年同月を上回る

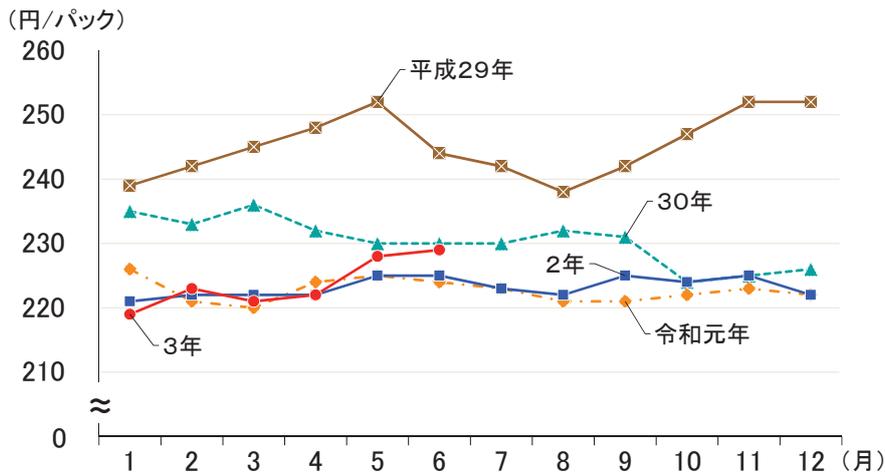
鶏卵小売価格は、国内の鶏卵消費量のほとんどが国内の生産で賄われていることから、卸売価格に影響を受ける傾向がある。

卸売価格（東京、M玉基準値）が3月以降4カ月連続で前年同月を上回る水準で推移する中、6月の小売価格（東京都区部）は1パック当たり229円（前年同月比4円高）となり、2カ月連続で前年同月を上回って推移し、直近4カ年（平成30年～令和3年）の中で平成30年に次ぐ水準となっている（図28）。

なお、鶏卵消費の約5割を占める家計消費

を見ると、5月の家計消費量（全国1人当たり）は1004グラム（前年同月比2.6%減）とわずかに、支出金額（全国1人当たり）は310円（同3.8%減）とやや、いずれも前年同月を下回った。しかしながら、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）発生前の過去5カ年（平成27年～令和元年）の5月の平均消費量（全国1人当たり900グラム）および平均支出金額（同266円）と比べると、消費量は11.6%増とかなり大きく、支出金額は16.4%増と大幅に、いずれも上回っており、高い水準にあることが分かる（総務省「家計調査」）。

図 28 鶏卵小売価格（東京都区部）の推移



資料：総務省「小売物価統計調査」

注1：消費税を含む。

注2：価格は、平成29年はLサイズ。平成30年以降はサイズ混合（卵重「MS52g～LL76g未満」、「MS52g～L70g未満」または「M58g～L70g未満」）。

（畜産振興部 前田 絵梨）